

(海外視察で得た教育観)

皆さんこんにちは。吹田新選会、足立将一、会派を代表して質問いたします。

市民の皆様の後押しをいただきまして市議会議員となってから、あっという間に4カ月がたちました。

日々の活動の中で、吹田市が発展するために市政は、議会はどうあるべきかを、また政治家としてあるべき姿を必死に学び、自分にできることを考え、行動しております。

8月はマレーシア、シンガポールへ視察に行っていました。今、成長期である両国の教育施策、開発事業、港湾事業、水道事業、農業政策等さまざまなことを学んできました。特に、両国の教育施策には学ぶべき部分がたくさんあります。母国語や歴史をしっかりと教えることで国民としての誇りとアイデンティティーをしっかりと養成し、労働政策や国家方針に合わせて教育施策を打ち、国民が一丸となって国家の繁栄のために力を合わせるという強い姿勢が非常に印象的でした。

皆さんは、国のためという言葉を知るとどう感じるでしょうか。もちろん、我々議員や公務員は国のため、市のために働くのは当然であります。教育の場で国のためという言葉を使うのはタブー視されているのが現実ではないでしょうか。それがマレーシア、シンガポールの教育の場では、国に貢献する人材をつくるというのが当然の目標なのです。

マレーシアは2016年に先進国入りを目指しており、シンガポールは狭い領土と少ない国民でなんとか国家を生存させようとしており、両国はそのための人材を必死かつ戦略的に育成されています。シンガポールの国家予算、第2位は教育費です。多民族国家であることの必然性でもありますが、中高生はバイリンガル、トライリンガルが当たり前という状況です。この状況を見て大きな危機感を抱きました。

この先、グローバル化がますます進んでいきます。新興国は、それを機に国力を伸ばそうと必死です。グローバル化で世界が仲よくという幸せな状況が生まれればいいのですが、軍事的にはそうなっても経済的には、残念ながら、そう甘くはありません。

既に、安い人件費と戦うことになった日本の製造業は生産拠点を海外に移転し、国内では雇用がどんどん細っています。より一層デフレが進み、日本の国力が弱まる可能性もあります。

さらにこの先、必死になって学んだ東南アジアの学生とゆとり教育を受けて育った日本人学生では、競争になった場合どうなるか、想像は難しくありません。実際、大分の立命館アジア太平洋大学の留学生と日本の学生がディベートしているのを見ると、海外の学生はみずからの意見をしっかりと持ち、その言葉の強さに日本人が押されているのを目の当たりにしました。

今の若者は悩んでいます。自分たちはどうすればいいのか、何のために働いて何をすべきかわからないまま就職活動をしている後輩もたくさんいます。若い世代の政治家として、今の日本はこれでよいのか、教育の現状はこのままでいいのか、非常に

考えさせられる視察でした。

今、日本は国家的な危機に陥っているというのはだれもが感じていることではないでしょうか。これを巻き返すことができるのは、やはり日本人一人一人の力、人材にほかなりません。私は、歴史を学んで、日本人の特性に誇りを持っております。新しい時代をつくっていく、そのような責任を政治家として感じるとともに教育のあり方を日々考えております。